

110-22『文典』のいわゆる代数的陳述法

清水 齋雄

はじめに

廣瀬健君から訊かれたことがある。

ギリシア数学は論証、中国数学は算法、左記の如きすね
インド数学はどうなりますか？

とつさの答が

偈、いやないですか。

偈(ゲ)は、漢訳佛典の用語で詩を指す(ギーターではなく
ガーターの)音詠有體形。

「この時世尊、重ねてこの義を宣べんと欲して、偈を説
きていたまわく

自我得佛來 所經諸劫數 無量百千下 度載河僧祇
常說法教化 無數億衆生 ...

散文の経文の要領に、詩形を述べられ、記憶に便にされる。
初期の佛典だけ、この偈が主体になつてゐる。佛典に限らず
インドの古典も、詩や簡潔な覚え句などが多い。これらは
暗誦され伝誦されてきた。『スチュルタ医典』の序の部分に
師弟向きあつての伝授中に向て横切子左、との規定がある。

耐久性のある書寫材料もなく、暗諺と建前の述作だから、表現の圧縮などの工夫がこらされた。平方根の計算式の組合の折れ、原句も一應あつておりたゞ[9]、[1]は「りこんで」と「けただけ」は解せがたい。たゞ之をいえば

サイン・コス コス・サイン

日本語では、数詞の二重性を活かした句が多い。
ひとよれとよ、ひとなみに、ふじさんろく
この種の覚え句は、使われないと意味不明にもなりうる。

夷しやふな 64827

因数分解すると、 $49^2 \times 27$ 、江戸折一升の立方分表示。

にし夷く士(は、下の月)

けよひヒツジ、フミの漢字覚え句は、ハチや説明しがたい。

士ツフエは一吋(インチ) 壽, 春の正字

インチやフットは和訓だが、時代の口偏り外来のレシピ。

中国では、咖啡とか、また広東特有語の音寫字に使われる。

とせかく本文が簡潔だと、後人の詳しい注釈が出てくる。

林隆夫『インドの数学』中公新書の151頁—

17世紀以降のインドでは、他の学術分野と同様、数学や天文学でも、オリジナルな作品はサン스크リットの韻文(詩)で著され、それに対する注釈書の類は散文で著されこと多かつた。

10-22『文典』(字幕) - ドラマ "ヤード

10-22の『文典』は、インドの古典語サンスクリットを完全に規定したもの。世界の文典中、最も最高とされる。その記述法が「代数的」と評されるのに、筆者は深い興味を覺えています。1971年に慶大のサンスクリット初級を学んで、専心して深まつたわけですが、1980年に至って、基本的な

O. Böhtlingk: Pāṇini's Grammatik

の複刊版が、京都の臨川書店で、出でることを知った。早速に手に入れ、手書き本なので、しばらくは放置、83年に意を決して、(4月1日めり), 32分の1ほどを何とか読んでみた。原文を窓レローマ字化、諸成分を探して辞書と共に、ベートリントが翻した訳文や注を頼りに解説する。その訳書記録は、教學セミナーの話題に含めさせ、繰り返す。ただしそれまで、印刷上の困難もあるから、そのままに放置、十年が過ぎた。手書きで丁寧な場を得て、ひつ書き、その十年間にその文字と云葉が、多少近くなくなった気もする。たゞ三ヶ月以内、三菱電機ビルディング北側、インド銀行扉に

स्वागतम् svāgatam

現代ヒンディー語だしされ、サンスクリットの辞書で解せよ。

svāgata, wellcome a, 最上級

デーヴァナガリー(梵字)

辞書順に、まだ母音字。長短の別もあって

अ आ इ ई उ ऊ ऊँ ल ए ऐ ओ औ^१
a ā i ī u ū ū̄ l e ai o au

下に。つきの呂やঁは、リのよじな音。eとoはついに長音。

子音字だが、まだ破裂音と鼻音の、 5×5 の組

क ka ख kha ग ga घ gha न na

ख ca छ cha ज ja झ jha ञ ña

त ta ठ tha ड da ढ dha ण na

ठ ta थ tha ड da ध dha ण na

प pa फ pha ब ba ফ bha ম ma

字と(では母音aなども有り)。hつての帶氣音はクハなどとの
りじくふる。naは東京式の鼻にぬり43才[°], caは4+, ñaは2+,

下に。つきの1は「反舌音」、あたり出てこないし、簡単には

。たしかに同音でつけさせた。帶氣音や濁音とはぐくと

ka na ca ña ta na ta na pa ma

つまに半母音

য ya র na ল la ক va

ী । । । 齒擦音, 氣音

ঃ sa ষ sa স sa চ hollow, stoppage

以上の順序、大文字には、アイウ…エオ $\text{お} \text{お} \text{う}$
カ…タナパマヤラワ…サハ
五十音と同じだから、覚えやすい。
字母の先頭がア a, 末尾がハ ha, これからも熟語
a hum 阿吽 あん

子音字母につく母音たぐい、a音で取去るノマヴィラーマ記号
口

a以外の母音にちなんだ記号と、前後上下つながれにつづる。

□ T f □ □ 𠁻 □ □ □ 𠁻 □ □ 𠁻 □ □ 𠁻

ka ki ku ki kū, e ai o au
29形を一文字にかけ、序書では ka, kā, ki, kū, ... の順
でとてばややまじきかくへば、ては頭がたぬ。けいめに
あげた母音字に、諸頭に現れる場合の形を、アなどではなく
あつきめてある。

なお記号として ← B + A , B → A + B

□: h (ヴィサルガ) 語末にのみ

□: m (アヌスヴァーラ)

𠁻: n (アヌターイカ)

s: ' (アヌアグラハ) 語頭にのみ, a省略記号

鼻音化のアヌスヴァーラの'は、ローマ字化ではm上にのる
が、このm字は原義より上では存在しない。samの原義はs'。

□ 大工の文字は複数の本音と複数の工具
と統合された後字形破裂音となり、これが対応する母音字に
変化し、辞書收録). 大て之

sainjñā → sañjñā 名前
+ 音, 母音工作せし連接方字と主大, 合字に有る.

त् + य → त्य

t ya tya

स् + त् + य → स्त्य

s t ya styā

2つ目は縦棒を取去つて横に連書する多いが, 上下に
連書するものも有る.

च् + न → च्छ, श् + य → श्य

c ña chña shya

形状が少し変化がある.

क् + त → क्त, द् + ध → द्ध

k ta kta d dha ddha

rとnの合字では, rが前側へ後側へと存在する.

ट् + क् → क्ट, ष् + ट् → ष्ट

ṭk ka ḫṭka ṣṭka ṣṭra

18° シヴァ経

(5) मनोऽसाम्

19° ニニ文典の冒頭

(6) अथ

शब्दानुरासनम् ॥

(7) atha

śabdānuśāsanam

2つ目、文法

統一して、字母を出る。これは普通の辞書順と順序があるが、文法規則を簡潔に表現するため、工夫された順序で、シヴァ経などとよばれる。すなはち第一に暗記すべきもの。母音なしの子音字が後置されたことで改行する。いま改行もし、左下句頭位置を適当に調節して掲げる。

अ

इ

ऋ

उण् ॥१॥

ऋृ

लक् ॥२॥

(1) अ

ि

ु॒ (1)

॒॒ (2)

॒

ए

॒॒॑ ॥३॥

॒

े

॒॒॑ (3)

॒॒॒ (4)

॒

ऐ

॒॒॒॑ ॥४॥

॒

॒॒॒

॒॒॒॑ (4)

॒॒॒॒ (5)

ह

य

व

रद्

॒॒॒ ॥५॥

ha

ya

va

nat्

॒॒॒॒ ॥६॥

अ	म	इ	ए	नम् ॥१॥
ṁa	ma	īa	ēa	nam (7)
ओ	मन् ॥८॥	घ	ठ	धास् ॥९॥
jha	bhañ (8)	gha	dhā	dhas (9)
ज	ब	ग	द	दस् ॥१०॥
ja	ba	ga	da	das (10)
ख	फ	च	ठ	थ
kha	pha	cha	tha	tha
		ट	ट	तव् ॥११॥
		ca	ta	tav (11)

क	पय् ॥१२॥	सर् ॥१३॥
ka	pay (12)	sar (13)

हल् ॥१४॥

hal (14)

句末の母音なし子音字は、字と書く区切りがて、字には属する。この字を書くと、今まででつながらった文字並びで31用字の2次元、起字+区切り+て、起字+2次元+4+3+かた字+ての3列が出来た。

たてそく 音序表の置酒の元 (ひのと里) 並んで立てる

an ん い a, i, u, う い え う い 文字並べ

a, i, u う い え う い 文字並べ

同样に 1 2

ak ん い a, i, u, う い え う い 文字並べ

ek ん い e, o, ai, au う い え う い 文字並べ

2a = 重田音 a え う い, 2 田音列掌の順次等書順工達ひふ, 2

ei え う い e, o う い え う い 文字並べ

ai, ei, ui, au う い え う い 文字並べ

3, 4れづか一指指示土木。

子音列掌の順左木, 子子 ha は生頭に未尾に重出, 半田音

ya, va, na, la う い え う い 文字並べ

順次工前元出木。4れづか 3 5×5 2部が出工 < 2 の 2 木, 2 部順次工入元工 2 木, 2 部順次工入元工 2 木。終書順工, 5×5 行列に見立工左木 1 木, 4れづか右轉運木。

ka kha ga gha na ah' ka ka ca ta ta pa

ca cha ja jha ña ait kha cha tha tha pha

ta tha da dha ña ait = ait ga ja da da ba

ta tha da dha ña ait gha jha dha dha bha

pa pha ba bha ma ña ña ña na ma

さらに上下逆(結果的には、元の配置の反時計直角回転)

ma ña na ña na ma

gha jha dha dha bha

ga ja da da ba

kha cha tha tha pha

ka ca ta ta pa

第5縦列 ma, ..., pa(唇音)でくりあう第2縦列とし

ma ma ña na na

gha bha jha dha dha

ga ba ja da da

kha pha cha tha tha

ka pa ca ta ta

上の上で第1縦列と第3縦列を、第1~3行だけ交換

ñia ma ia na ña

jha bha gha dha dha

ja ba ga da da

kha pha cha tha tha

ka pa ca ta ta

第5横行 ka, pa, 未尾は第7-9行

母音の階次

文典本文は、つゞいて始まる。

वृद्धिरादैत् ॥७॥

vṛddhinādaic (1)

「」の下に母音記号ए, つゞいて母音記号ओが並んで合字ddh, ए下母音記号ए, dの下母音記号ऐ, C下ヴィラーマ。

ヴリットヒラーダイチ

これは2語の統一書であるが

vṛddhiḥ अdaic

前語の主格詰尾हि, ハル变成了の連書。ヴリットヒラーダイチ文法用語で、ソ外逃ヌアーダイチ, दエクハ८९

ए & अic

ソのアイチは、シガラジに照らすと

+ai, au

ソ27行1句の意味は

ヴリットヒラーダイチ, ए & अi, au

第2~3句では、外逃が先にくる。1句だけ逆順なए, वリットヒラーダイチ, 加強の義の, ए27行2語, この文典の
章末を祈念する(ビラーダイチ), と注にある。

अदेह गुणः ॥२॥

宋教の音義

aden gunah (2)

アーテーン グナハ

グナが文法用語で、^{ヒン}外辺がアーテーン、dをアーティ

aとen

エーンは、シヴァ終に照らす

e, o

एवं एवाの意味

are, ova, グナ

इको गुणवृद्धि ॥३॥

iko gunavṛddhi (3)

イコー グナヴリッドヒー

i, u, ई, उ, एवं, ग्नाविड्दिः

外双のik, +音語幹名詞の李教音尾がつる ikah, ikh

が近く諸段の有声子音で、-oに変じてu, 石丸, 句末の

元は、双数音尾。

以上、^{ヒン}1～3句め、^モ音の階次を追引したもの。基礎用音
は、aチナハアハ加ハツハ、強印階上み、ヒヂ。

基礎母音	i, ī	u, ū	ṝ, ḷ	l
guna	a	e	o	ar
vṛddhi	ā	ai	au	ār

サンスクリット語で、隣接する二語の語末・語頭向、そして
諸吸音向での音変化、連声(レンジヨク)がりうる。

これが規則たてて一章である。語末・語頭の母音向で

① 同種の母音の結合、γの長音である。

na asti iha → nāstīha

1) -a, -ā は、u, ūなどと結合して、ya guna となる。

tadā uvāca → tadovāca

2) -a, -ā は、e, o と結合し、ya vṛddhi となる。

tava eva → tavaiva

また、ai, au と結合し、さらに吸収される。

3) -i, -ī, -u, -ū, -ṝ は、要種の母音の前で、半母音
-y, -v, -ñ となる。

4) -e, -o は、

4.1) a 以外の母音の前で、-a となる。

4.2) a の前で、a 变化 (touが、a が j に消滅)

アヴァグラハ記号となる。te api → te'pi

5) -ai は母音 a の前で -ā となる。

6) -au は母音 a の前で -āv となる。

頻出字 ca, na, an. 曲用・粹組

小見出しは、参考の便宜につけたもの。以下も同様。

त धातुलोप आर्थ्यातुके ॥८॥

na dhātulopa ardhadhatuke (4)

kīrti ca ॥४॥

kīrti ca (5)

दीधीवेवीटां च ॥६॥

dīdhīvevitām ca (6)

第4句の頭のnaは、否定詞。般若心経にちりと出てくる。

... na vedanā na saimjñā na saimskārā na vijñānām
受も 想も 行も 識もなく

... na jñānām na praptih.

智もなく まこと 得もなし。

第5, 6句末のcaは、andだが、例句の末に後置される。

ラテン語のqueも同様で、たとえは"

virginibus puerisque (少女と少年のため)

ホーラティウスの詩から採った、スキヴィンスンの著作の題。

第5句, caの前が複数は
keiti m-iti で、
を一緒にまとめたが, 第6句は
dīdhī vevi
などとまとめて。第4-6句, 認を一応つけながら
したがいのが, 諸幹の欠けたアルトハ諸幹接尾
k, n ともつ接尾辞の前, も
複根 dīdhī, vevi 末字, 増字にに対して, も

हली अनतराः संयोगः ॥९॥

halo ^अnantaraḥ samyogah (7)

29-0'-のところは, 連声によると a-, もじ下と

halah anantaraḥ

-ahは曲用諸尾, 複数主格, halはシヴァ語から

ha, ya, va, na, la, ---, ha

十音のすべて. an- は否定詞 a- の④音の前で9形(24
も般若心経に出7, <3>). antara は, 例の別物. 422,
十音ひつか, リハク統(アヌ), サニヨーガ.

मुखनासिकावचनो अननासिकाः ॥१॥

mukhanāsikāvacano ^अnunāsikah (8)

鼻と口で“u”の音, アヌナーシカ(鼻音)
 mukha が mouth, nāsika が nose, kā から “au” の u
 uvaca との連声 云う, 語根は vac, voice.

サンスクリットの名詞・形容詞などの曲用の構組は

性: 男, 中, 女

数: 単, 双, 複

格: 主, 対, 具, 尖, 奪, 屬, 处, 呼

格のよみ名, Nominative, Accusative, Instrumental,
 Dative, Ablative, Genitive, Locative, Vocative.

曲用の基本型, 子音語幹の場合の格語尾, 絶対語末形"

単

双

複

男・女・中 男・女・中 男・女・中

主

-

-

-au -ī -ah -i

呼

-am

-

-bhīk -bhīk -bhīk

対

-

-

-bhīm -bhīm -bhīm

具

-ā

-

-bhīh -bhīh -bhīh

尖

-e

-

-bhīyah -bhīyah -bhīyah

奪

-ah

-

-bhī -bhī -bhī

属

-ī

-

-ām -ām -ām

处

-i

-

-su -su -su

連声の例外など

तुल्यास्यप्रयत्नं सर्वर्णम् ॥१॥

tulyāsyaprayatnām savarnam (9)

同じよじにえうが、サヴァルナ

नार्त्कली ॥१०॥

nājjhalau (10)

これも連声

na ae+hal に双数語尾 au

(サヴァルナ) でない、母音と子音とは

語末の無声無送音の後で、諸吸の h- がくろと、無声音は有声
になり、h- は同種の有声帶文音に存る。左二行

-k + h- → -g + gh-
-c + h- に適用する -j jh-

ईदूदेद्विवचनं प्रगृह्यम् ॥११॥

īdūdeddvivacanām pragṛhyam (11)

ī, ī, e, ɔ 双数語尾は、プラグリヒヤ

連声の変化をうなぐ。以下同歎の諸尾を、第19句チ

筆者註。2011年2月，解説用で字田順詩句原引
は丁度改めた。

अदसी मात् ॥१२॥

adaso māt (12)

(代名詞) adas o, m 長音形 (= amī)

शे ॥१३॥

še (13)

(asme, yusme αウェーディの)e

निपात एकाजनात् ॥१४॥

nipāta ekājanāt (14)

小詞，一母音 i a e y u t s n l r + a c + a nāt

2音目付，eka + ac + anāt

श्रीत् ॥१५॥

ot (15)

o終り (15)

アシタ句不統 (アシタ句不統)

丁度P14、筆者解説用にアシタ句不統 (アシタ句不統)

संबुद्धौ शाकल्यमेतावनाष्ट ॥१६॥

sambuddhan śākalyam yetāvanāṣṭe (16)

呼格の〇は、シャカルや説では iti で非リシ目的の

उम अ॒ ॥१७॥१८॥

uñā um (17)(18)

u, (yā iti の前) um

ईदुतौ च सप्तम्यर्थ ॥१९॥

īdūtā ca saptamyartha (19)

īdūt, 第七格(処格)では

दाधा घ्रदाप् ॥२०॥

dādhā ghṛadāp (20)

dā, dhā ジグフ-, dāp ジギク

आद्यानावदेकस्मिन् ॥२१॥

ādyantavaradekasmin

始と末節とも、一音節のは

一音節なら始の・末のとu; 文法規定を同時に適用する。

代名詞

तरप्रमपौ यः ॥२२॥
tarapramapau yah (22)

-tara, -tama は形容詞の比較級、最高級をつくる接尾辞。
-tara, -tama は形容詞の比較級、最高級をつくる接尾辞。

बहुगणवतुदति संख्या ॥२३॥

bahuganavatudati saṅkhyā (23)

bahu, gana, -vat, -ati は、数詞
2語目、サンニヤーが表す。

षाण्टा षट् ॥२४॥

snāntā sat (24)

s, n 終りの(数詞) べ、六

sの後でnがnに変じている。数詞で、曲用が複雑な
eka, dwi, tri, catur 一~四

五~七外1たあとa, 五~十。曲用上では通常
pañcan, śas, saptan, astan, navan, dasan

s, n で終る3~6語目、六。-n α形、辻文法書を参照。

इति च ॥२४॥

dati ca (25)

-ati, も

कृतवत् निष्ठा ॥२५॥

ktaktavatū nisthā (26)

-ta, -tavat ハ, = レタ-

कृ + त् 合字

सर्वादीनि सर्वनामानि ॥२७॥

sarvādīni sarvanāmāni (27)

Sarva を始め、サルヴァ + マン(代名詞)

サルヴァ, 般若心経にも出る。

sarva-dharmāḥ (諸法), sarva-buddhāḥ (諸佛)

+ マンは name. 合して general name, pronoun. 出てくると何でも指せる名詞の形, これ, かれ, あれ, どれ。
この諸の物に居合わせたい人は, これではわからぬいとき,
具体的な名詞の代入が必要で, 指示詞が名詞に特殊化される。
文章書では, 先行する名詞の代名詞化が普通だが, 本家の言
文は指示詞がむしろ先行(?)

サンスクリットの指示詞、その代表的方形を例示すると
され tad, adas (第12句に出てる)
され etad, idam
関係・疑問 yad, kim
人稱, 该 tuad, 複数 yosmad " a 極端形 vah
" mad, " asmad " nah
人稱正の順序左下, サニスクリット? IF
prathama purusa (初人稱) = 3人稱
madhyama " (中 ") = 2 " "
uttama " (高 ") = 1 "

3人稱は、汎人稱とされたい氣不符。名詞と引対する形。

人稱だけは限らず、動詞詔用の單数に存在。

代名詞の曲用は、一般の名詞・形容詞と共通である。

tad など之が单數形格以下 tasmai, tasyai, ...

29 特徴の方形を共有する、代名詞の形容詞。辻 § 422 付。

1. anya 型, 主に tara, tama (19-22句)

2. sarva 型 (第27句)

3. pūrva 型 (第34句)

4. prathama 型 (第33句)

5. dvitīya 型

6. nema 型 (第33句)

複合語

代名詞的語尾についての規則が続く。

विभाषा दिक्समासे बहुव्रीहौ ॥२८॥

vibhāṣā diksamāse bahuvrīhau (28)

好みでよし、方向の合成のバフリーヒ(所有複合語)

dik + 方向 + samāsa 合成語(第30句にも出る)。たとえ 15' uttara-pūrva 北東(チタ 上前)

单独では pūrva は代名詞的語尾であるだけ、合成されて所有複合語になると、名詞的変化にしてもよい、というふう。

न बहुव्रीहौ ॥२९॥

na bahuvrīhau (29)

(代名詞的)でない、(他の)バフリーヒは

तृतीयासमासे ॥३०॥

trītyāsamāse (30)

第三格(具格)による複合語

語例 17 māsapūrva, sainvatsara-pūrva (第47句)

māsa 月 month, sainvatsa 1年, = svah

द्वैद्वा २ ॥३७॥

dvaindva ca (31)

並列複合語, も

語例とし pūrvāpara, pūrva + apara 前と後と.

サンスクリットでは、長大な複合語で、自在にまた好みで造る。ローマ字化して1行約70字の組合に収まるが、(出会い)。列挙くせによるのだが、もともと

brāhmaṇa-ksatriya-vit-sūdnāḥ

バラモンとクシナトリヤとヴァイシャとシエードラ
区別し列挙することによって、固づくりだした。

複合名詞の造り方は6種に分かれ、六合狀の名もある。

- | | | |
|-----------------|-----|---------|
| 1. Dvaindva | 相違狀 | 並列複合語 |
| 2. Tatpura | 依主狀 | 格限定複合語 |
| 3. Karmadhanaya | 持業狀 | 同格限定複合語 |
| 4. Drigu | 帶數狀 | 數詞限定複合語 |
| 5. Bahuvrīhi | 有財狀 | 所有複合語 |
| 6. Aryayibhāva | 隣近狀 | 不变化複合語 |

弘法大師 空海全集第2巻268-9ページにこの六合狀
が、左記 2, 5, 3, 6, 1, 4 の順に出でく。
すて 1, dvi =, タ原義 2"

artha-dharmau 実利と法と

のFの如く、対ての複合語が其例に存在。これが対応から双数、
土の四姓の列挙が複数、対照が主眼で单数のこともある。

sukha-duhkham 楽と苦 悪

2.たゞ、原語は(1章2の第42句に出る)

tat-purusa 彼の召使

2の語自体が、その実例。AのB, Aのたぐい、Aの類など

3.原語(2七十同句に出る)

karma-dhanaya 業を持つ

2.同格複合語の例として

kumāra-pandita 少年で学んでゐる

saddharma-pundarika 正法で白蓮のトント

形容詞+名詞の例も多く。

prathama-divasa 第一日、朔日

4.原語

dui-gu 二頭の牛の価値ある

2の語が、その実例。形容詞+名詞で、形容的の如き。

5.原語は、土の第28-29句に出でます。

bahu-orichin 多くの米をもつ

2の語が、その実例。古文書の後語、アーリー七は

535, オリサ, ライス, ...の語源

左の辞書では、つどい語を挙げ
bhīhad-ásva 多くの鳥を持つ
比較に、つどいギリニ語を挙げたり。

Phil-ippos 好馬の人

6 a 原語
aryaya 不変化詞

アリ、2a語に41句に出てく。不変化複合語例 17

upa-nājam 頂近く王に

不変化詞+名詞で、副詞的用法。

アリ、前句第31句に続き

विभाषा जसि ॥३२॥

vibhāṣā jasi (32)

好んでよー、(並列複合語の)主格複数語尾-asは
後語は、辞書では合ったのが出てこぬ。バートリ=79、
第二巻の文法要素解に当たる。

jas オヨビ jasi 主格複数の語尾as。…代名詞に因る。

1, 1, 32. …

と、2の箇所が示すところ。例語の katarakatama

katarakatame または katarakatamah

前者が代名詞的変化、後の名詞的変化。-h は語末で-。

प्रथमवरमतयाल्पार्धकतिपयनेमात्र ॥३३॥

prathama caramatayālpāndhakatipayanemāśca (33)

prathama, carama, -taya, alpa, ardha, katipaya,
nema も

長い句だが、ローマ字化と对照してみると、異なり。

... taya + alpa + ardha ...

→ 連声で、āに変えさせ、原字ではT不出し、間につく。

parathama 最初の, carama 最後の, -taya 語尾の例
dvitaya 二重の, alpa 少しの, ardha 多いの, katipaya
若干の, nema 他の, 半分の。末字śca は श्च + काの合字。

पूर्वपरावरदक्षिणोत्तरापराधरापि

व्यवस्थाधामसंज्ञायाम् ॥३४॥

pūrvaparāvara daksīna uttarāpara dharaṇī

vyaavasthāyāma saṁjñāyām (34)

pūrva, para, avara, daksīna, uttara, apara, adhara
等、時と所の意義で、名前で+万十れば

前諸の中には kṣa, क् + ष がいたり見極め難い。別に
ある。後諸の श्च jñā + 解り難い。pūrva 東, 前の,

para 旁, avara 西, T⁹, daksina 南, 右の, uttara 北, 左の, apara 西, 後の, adhara T⁹. 後者と成る左, vyava-sthā (文法用語 = 17) 時・所の固定, 'stha す
a-否定 samjnā 名前.

स्वमनातिधनाखायाम् ॥३४॥

sramajnātīdhanākhyāyām (35)

sva す血縁・財産を指す方四十行

a-否定 jnāti 血縁, dhana 財産. sva 自身.

अनारं बहिर्योगीपसंचानयोः ॥३६॥

antaram bahiryogopasamvyānayoh (36)

antara す, 外側を意味しまた下着と縫いつくること

antara す普通の内側, grha いわゆる外側の意味である。
uji, bahis 外側, samvyāna 上着, upa- がつ す下着.

स्वरादिनिपातमव्ययम् ॥३७॥

svarādinipātāmavyayam (37)

svar を始め小詞とアダヤヤ(不变化詞)

svar 天は語例, ādi は第2句に出た. nipata 小詞も第14句
に出てる. 以下の例でいふと四つ続く.

接尾辞 格詮尾

108 || तद्दितस्यासर्वविभक्तिः ॥३८॥

तद्दितस्यासर्वविभक्तिः ॥३८॥

taddhitaścasarvavibhaktih (38)

taddhita つさが まるごと 格詮尾でなければ

कृन्मेजंतः ॥३९॥

kṛnmejantah (39)

kṛt つま m.e, o, ai, au 終り

第38, 39句頭

taddhita, kṛt

は接尾辞の二大別。 kṛt が第一次

man- → man-as- → manas-vin

考之三

心

思慮に富む

て, as は kṛt 接尾辞, vin は taddhita 接尾辞。第38句

vibhakti は格詮尾 人稱詮尾。 तत्स्, यत्स्, ... などは

taddhita だが, तस् は格詮尾でないところ, と注にある。

第39句, 分解すると

kṛt m·ec antah

ec はエウガラニティ = 重複音 e, ..., au.

कातोमुनकसुनः ॥ ४० ॥

ktvātōsunkasunah (40)

(絶対分詞 a) -tvā + (不定詞 a) -tos + -as

k- 2冠 t- 形は第26句に出てて、um 184で解った。

अव्यपीभावश्च ॥ ४१ ॥

avyayibhāvaśca (41)

不変化複合語も

末尾のcaが例句の「形」。

शि सर्वनामस्थानम् ॥ ४२ ॥

śi sarvanāma sthānam (42)

(中性複数、主・対格 a) -i, 代名詞的ストラ - +

मुदनपुसकम् ॥ ४३ ॥

sudanapum sakaṁ (43)

(格語尾) s, au, as, am, au, 中性 + a Y < napum saka 中性, a- て否定。前述は sut, 文法要素解説

sut 1) 最初の五の格語尾

格語尾の順だな、第43句のドイツ訳文は

die Endungen des Nom. Sg., Du. und Pl.,
und des Acc. Sg. und Du.,

主格 連数 → 双数 → 複数 →

宾格 单数 → 双数

左順で語尾を列挙するのが、本文第4章1の第2句。

「適当に改行して示せ」

svau jas-

amaut̄chast-

ā bhyām this

ne bhyām bhyas

masi bhyām bhyas

nasosām

iyos sup

* えた子音字となりたり、書の形にちたは

N. S (さ) au t̄ - as

Ac. am au as

I. ā bhyām this

D. e bhyām bhyas

Ab. t̄ as bhyām bhyas

G. as os ām

L. i os su

近文法 318° - じ ^ア _音, m. = f. a 部分 (中性), を除き
于て呼格 V. では \neq <) .

「之音つもての

su, au, ja^s, am, aut, -t, sup

これをシラバ経と同様の方式で使之去取, 471句訳注にある。
たゞ之れ, ちへの格宿尾を一括

sup

最初の5箇正手とめたのが, 229

sut

解, 244行, 楽趣もみつめ, 当初は更當もつかなかつた。
何分之この箇所には訳注がない。

न वेति विभाषा ॥ ४४ ॥

na veti vibhāṣā (44)

てたゞ, または, はビブハーサー(佐意)

इग्यणः संप्रसारणम् ॥ ४५ ॥

igyanah samprasāram (45)

i, u, n, l \sim y, v, r, l \sim r, サンプラサーラナ
レテア経から ik, yan て母音, 半母音の4箇對を取出す。

代入の指示法。すなはち「-の裏」を「-の前」に置く。

आदानौ टकितौ ॥४६॥

ādyantau takitau (46)

始と終との、 t = k とを黙音にもつては"

例えば it は前に立てるし, suk は後に立てる (S と H)。

後語中の it が黙音を指す。つまりの前語 aid < it と同様。

मिदाचो इन्यातपरः ॥४७॥

midaco ?ntyātparah (47)

m と黙音にもつては"母者で", 最後に從うる

एव इग्रास्वादेशे ॥४८॥

eva igghrasvādēśe (48)

e, o, ai, au E, 短く立つと i, u (E) と

後語は, ik + hrasvā + ... i, hrasvā 短い音 (E)

षष्ठी स्थानेयोगा ॥४९॥

sasthī sthāneyoga (49)

第六格(属格)は, का एवं (au) と 音

29 第49句については、第66-67句のとく3で触れる。

स्थाने इतरतमः ॥४०॥

sthāne 'ntaratamah (50)

एवं, 最も近い關係の

उत्तरा रपाः ॥४१॥

urāṇi naparāḥ (51)

凡や凡て a, i, u や y の長音は、凡てあとに

अलो इन्यस्य ॥४२॥

alo 'ntyasya (52)

a, --, l (全音), (代入代入物) 最後音に

सिक्ष ॥४३॥

śikṣa (53)

(一音たり多くても代入物が既音) ॥४३॥

आदेः परस्य ॥४४॥

ādeḥ parasya (54)

最初音に, (奪格の) さうの諸の

अनेकालशित् सर्वस्य ॥४४॥

anekālśit sarvasya (55)

一音たり多く代入物が歎音इत्थे, 全体に
244行のうち53句。

स्थानिवदादेशो ऽनलविधौ ॥४६॥

sthānivadādeśo ?nalavidhau (56)

代入語は原語と同じ規則に服すべし, 音に因らずは異る。
例えば-yat-tva の代りはいつも動詞の絶対分詞たり至り
約40句の不变詞。しかし先行音に対しこれぞれ異在す。

अथः परस्मिन्पूर्वविधौ ॥४७॥

acah parasmīnpūrvavidhau (57)

母音は、土の音のもとにも因して

न पदानविरचनवरयनोपस्थासवर्णा-

नुस्थारदीर्घजश्चर्विधिषु ॥४८॥

na padāntadrīvračana varey alopsvarṇā-
nuśārādīrgha jāścarvidhiṣu (58)

先の規則を適用し *ta* のが、語末音、語音重複、*vvara*
z'a ya 落ち、張勢、サヴァルナ、アススヴァーラ、長音
ja, …, da (有声無氣), *ca, …, sa* (無声無氣)

padanta 語末音, *dvirvacana* 語音重複, *svara* 張勢,
dīrgha 長音. チタニヤ^{アラマダラ} 経ハシ

jas: *ja, ba, ga, da, das*

car: *ca, ta, ta(v), ka, pa(y), sa, sa, sar*

（カ）^ル 注釈があるが省略する。

द्विर्वचने स्वि ॥५९॥

dvirvacane svī (59)

語音重複で、母音のところに

अदर्शानं लोपः ॥६०॥

adarsanam lopah (60)

出でて方への木、口パ

口パ^ル 第58句にも出てます。

प्रत्ययस्य लुक्ष्मलुपः ॥६१॥

pratyayasya lukaślalupah (61)

接辞の（口パ）^ル, *luk*, *ślu*, *lup* ^ア表示

प्रत्ययलोपे प्रत्ययलक्षणम् ॥६२॥

pratyayalope pratyayalakṣanam (62)

接辞のローパ、接辞が土オモウ

न लभताङ्गस्य ॥६३॥

na lumatāṅgaśya (63)

ナム、ル持ち語基のナ

第61句の luke, ślu, lups は一括りで lu-mat, lu です。
-mat は -vat もとに、所有を表す形形容詞を作った接尾辞。
a, ā が語幹末母音のみとし、語幹末子音の前にあたって、諸
幹が m, s など破裂音で終る場合には、-vat の形。

अचोऽन्त्यादि ति ॥६४॥

aco 'ntyādi ti (64)

母音で、最後の子音つきのア、ティ

अलोऽन्त्यात्मुर्वे उपदा ॥६५॥

alo 'ntyātmūrve upadā (65)

音で、最後のに先立つアボ、ウパダ

超文法

तस्मिन्निति निर्दिष्टे पूर्वस्य ॥६६॥

tasmanniti nirdiste pūrvasya (66)

「そこによく(處格で)あれば、すぐ前にあるのへ

तस्मादित्युत्तरस्य ॥६७॥

tasmādityuttarasya (67)

「そこからと(奪格)あれば、後にあるのへ」
指示代名詞 tad 1), 単数男性形の格変化

sah, tam, tena, tasmai,

tasmāt (奪格), tasya, tasmin (處格)

この處格、奪格形をもつた対句。ドイツ訳では第66句は

Wenn Etwas im Locativ angegeben wird ...

さきまで出てく文法句で

ある語が處格に向って「たら...

文法句の解釈の約束として

その語のちく前の一語に

実例として、第6章 14 第77句

iko yanaci

ik : i, u, n, l

yan : y, v, n, l. ac: タハラの母音a, ..., au
事例とでは、母音の前で ik → yan に変換されたが、
後語 a-i は「属格」 yanac は ik にさかのばり、の義。

第67句の例と1つ、第8章1の第28句

timatinah.

tin は定助詞を指し、yiti-tin-a で a-tin, -ah で「李格」
tin が a-tin の後にくわづ（無アクセント）

といふに訳される。第67句の通用例とひがたが、
こちもひまつて解しがた。

文法句の解釈上の約束と1つは、その第49句も同様

属格は、句のどこにいようと

これらは「超文法」たがたが、さうに一般的に

स्वं रूपं राजूस्याराजूसंज्ञा ॥६८॥

svam rūpam śabdasyāśabdasaṁjñā (68)

「のすまの音の通り、文法用語でなければ」

śabdasya 音, a-否定, śabda-saṁjñā 文法用語。

句は、唱えて聽いてこの音の通りに解釈され、ただし文法の技術的な用語でなければ、といふたが、往々つづく
2の規則も、1つ二つは必ずしも遵守していない。

人稱語尾

अणुदित् सवर्णस्य चाप्रत्ययः ॥६९॥

anudit savarnasya cāpratyayah (69)

a, ..., l × u あるいは、同質 a, t, 接辞で a なければ"

तपरस्तकालस्य ॥७०॥

taparastatkālasya (70)

(母音 e) たりつけたのは y の持続時間のもの
それだけ解釈され

t-aparas tat kālasya

オーラは時間、これでは母音の長短のこと。

आदिरन्त्यन सहेता ॥७१॥

ādir antyena sahetā (71)

最初と最後で、(並んで) 一緒に

これら、レヴァ経方式の、一般的な定式化、第43句では、

第4章1の第2句の格語尾列から、或る箇所で取り出された。

第3章4の第78句、動詞の人稱語尾列を y で引いておく。
初(3)人稱の單・双・複數、中人稱、高人稱の順に

tip tas jhi sip tha mibras mas

2+が直説法現在のP(Parasmaipada 爲他言)諸尾。

統して願望法のA(Ātmanepada 爲自言)諸尾,

tātam jha thāsāthām dhramidvaki mahin

2+2+指17, tin, 人稱諸尾一切, 于不定動詞。上記“

jh

のとこ3に付, 実際にはつぎのとさらかで代入する。

ant, at

4+2+直説法現在Pの人稱諸尾は, 西洋式順序

单数 双数 複数

1人稱 mi vas mas

2人稱 si tha

3人稱 ti tas a(n)ti

ギリニ3語a, 其動詞では, 2+4+

1人稱 me mes

2人稱 or tor te

3人稱 tu tor (ɔ)ντ(ɔ)

この对照だが, +1=ストリットとギリニ3語との同系性は
瞭然とする。

येन विधिस्तदनास्य ॥ ७२ ॥

yena vidhistadantaśya (72)

७२, 文法則の最後の

वृद्धिप्रस्थाचामादिस्तद्वृद्धम् ॥ ७३ ॥

vṛddhīpṛasyācāmādistadvṛddham (73)

ヴリドヒの母音を記せ
ヴリドハ

त्यदादीनि च ॥ ७४ ॥

tyadādīni ca (74)

tyad たり, も

एड् प्राचीं द्वेरी ॥ ७५ ॥

ei prācāmī desē (75)

e, o, 東の地方で

東の地方での方言的なる。 2つめ一段落にて、結び句

॥ इति प्रथमस्थायायस्य प्रथमः पादः ॥

iti prathamasyādhyāyasya prathamah pādah

以上、第1章の、第1脚(19-7")

第4脚の終で章の終。2の4脚の章を重ねた、第8章の終に
eti śabdānuśāsanām samāptam
2のiti

इति

(聖大學山・勢・健葉)

インド吠諦の終に出る。THE END, FIN あたり。佛典も
章ごとの終に、2のiti… がつづる。

- [1] PĀṇINI'S GRAMMATIK herausgegeben, übersetzt,
erläutert und mit verschiedenen indices versehen von
OTTO BÖHTLINGK, Abteilung I, II, 1887. 鎌川書店 1977.
- [2] A. A. Macdonell: A practical Sanskrit Dictionary, Oxford 1929.
- [3] 岩本裕: サンスクリット文法綱要, 山喜房伝書林, 昭40.
同: サンスクリット文法, 同朋舎, 昭62.
- [4] 近直四郎: サンスクリット文法, 岩波, 全書, 1974.
- [5] 沢英三: インド文典, 丸善, 昭35.
- [6] 稲葉正就: ベート古典文法学, 法藏館, 昭29.
- [7] 矢野道雄編: インド天文学・数学集, 朝日出版社, 1980.
- [8] 林隆夫: インドの数学, 中公, 新書, 1993.
- [9] 清水達雄: 斜角線の計算式, 数学セミナー増刊, 数学
100 の問題, 日評, 1984.